

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## <随想>わが大姫考

著者	堀江 泰紹
雑誌名	日本文学誌要
巻	41
ページ	86-87
発行年	1989-09-18
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019584">http://hdl.handle.net/10114/00019584</a>

## わが大姫考

馬場あき子氏の『大姫考』（大和書房刊）によると、伊邪那岐の大姫・天照が、弟の須佐之男をしのぐ万能の巫咒力をもっていたという。このことは大姫の存在力をきわめて象徴的にあらわしている。ここでいう「大姫（おおひめ）」とは長女のことである。

大姫（長女）は単なる出生の順位による敬称ではなくて、一般の能力をしのぐ大きな力、それは原初的には推移する時の流れの方向や、生活そのものへの示唆や、集団の保ち方への啓示であった。またそうしたすぐれた力をもった女性への敬称でもあったのだ。

大姫の繁栄は、家そのものの繁栄につながったことは、藤原氏と天皇家との長い姻戚関係をみても明らかである。その濫觴は冬嗣の大姫五条后・順子や、道長の繁栄を象徴した大姫・上東門院彰子などであった。

一方、天皇家の大姫については、殆ど犠牲を強いられる立場におかれていた。即ち、齋宮・齋院という祭祀の儀としての命運が例外なく待ちうけていたのである。こうしてみると、大姫の命運は少な

## 堀江泰紹

くとも家の命運の一端をになっていたことはたしかである。

ところで、私はいまある遺稿集の編集を頼まれてその作業をしている。東京都町田市で昭和十九年から六十年まで約四十年間小学校教員をし、最後の五年間は女性校長として活躍し、退職二年目で亡くなった女性教育者の遺稿集である。

私はこの遺稿を読みながら、ふと馬場氏の『大姫考』を想起したのであった。かりにこの女性教育者をFさんと呼ぶことにする。

Fさんは大正十四年、東京都町田市下小山田の旧家の長女に生まれた。府立第四高女から東京第一師範女子部を卒業して、昭和十九年に生地の国民学校の教師となった。しかし、昭和二十一年に肋膜炎に罹り、長い療養生活に入る。

Fさんは、療養生活の中でも自分が長女であるという意識をつねに持続する。そして、当時村会議員であった父もまた長女Fさんへの期待を抱きつづけ、退院した時のためと、広大な旧名主屋敷を娘のために購入用意する周到さである。

父親は病院を訪ねてFさんに言う。

「年頃の娘が病気になるって、嫁にも行けず、苦勞するといけないから、住む所だけは用意した。退院して療養場所にするがよし。治療費が足りなければ売って、治療費にあてるがよし。また元気になるって嫁に行けるようなら嫁仕度に当てるがよし云々」

長女の適齢期は、おおくその父のもっとも波乱の多い活動期に当たっていると馬場氏が書かれているが、Fさんの父も村会議員・農地委員と、村政の中核にいて活躍していた。長女Fさんの処遇にはひと倍心をいためていたことが遺稿の中に記されている。

Fさんはこうした父に対して、長女としての矜持を持ってその後病氣から回復したのちも感謝とともに責任を重くしていったようである。旧家とはいえ、Fさんの家は農地改革で小作地の殆どを失ない、生活は清貧に甘んじなければならなかった。その中で七つ下の次女や三女、長男の弟たちの進学特訓をし、その学費の心配など、経済面での負担を一身になうこととなったのである。

長女の命運がある種のきびしさに律しられていることは明らかであるが、Fさんの命運もまたそうしたきびしさで共通していたと言えるだろう。

馬場氏は「大姫―闘うべく闘わされた宿命の姫たちの名である」とも記しているが、Fさんもまた肺結核との撓まぬ闘病の中で健康を取戻され、社会復帰（国立相模原病院の結核病棟の同僚患者十数人の中で生き残った数名のなかの一人）して再び小学校へ勤務しはじめるのだが、Fさんの双肩には老いた父母と弟妹たちの暮らしを援助する宿命が待っていたのである。

Fさんが病身でありながら真剣に一人の男性を愛し、しかも結婚を断念する経緯が記されている日記などを読むと、長女としての矜持ゆえの決断と納得するものが感じられる。といって、Fさんが一切の自我を殺して生きたというのではない。人一倍ゆたかな感性に支えられ、しかも世の中を理性によってみつめ、科学的な判断をその行動の基本としていたことは、Fさんが二十二歳当時の日記に表われている。

昭和二十二年五月五日の日記には次のように記されている。

『「古きもの新しきもの」という題で、五月空にひるがえる鯉のぼりと、悠然と編隊を組んで飛ぶB 29とを一つにまとめた組写真が新聞にでていた。

風に吹かれて空中高く泳ぐ鯉のぼりに、男の子の成長とたくましさを感じたのはたしかに一世紀まえのものとなった。

科学の力!!これからの世の中は科学の世の中だ。科学のない力はそれがどんなに大きなものであっても負ける」。

Fさんは、昭和三十年代に再び入院、胸部成形術、空洞切開縫縮術を受ける。昭和四十二年はじめて学級担任を受持つことになるがその後、管理職試験を受けて教頭となり、次いで校長となって教職を定年まで全うしたのである。

Fさんは生涯にわたって生まれた家のことが頭から離れなかった。父から買ってもらった家屋敷も生家へ返還すべきという考えをもっており、亡くなる直前、弟の次男、つまり甥と養子縁組をし、養子には遺書が書き残されていた。

庶民であるFさんの「大姫」の生きざまを辿った次第である。

（一九六二年卒）